

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-05-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 花岡, 永子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004621

歴 史 لح 自 然 0) 関 係 0 間 題

へと流れてゆくような時と共に生じるいわば客観的事実を記述した 歴史と言えば、一般的には過去から現在へ、そして現在から未来

史である。 Historie である。人間の自己の主観を交えない客観的な年代記的歴 する。 これは、 R・ブルトマンの 歴史解釈に従えば ドイツ語での もの としての年代記を、 あるいはそのような 客観的な事実を 意味

また、終末論的な出来事そのものを意味することもありうる。これ の中での出来事の記述が意味されている。 過去へと流れてゆく、先の時に比すれば、いわば逆方向に流れる時 な時として、これを基点とし、そこから現在へと、そして現在から 経綸において、最期の審判の時を究極的なものの成就される決定的 ス以来の終末論的な歴史が、つまり、神の摂理による計画としての しかし、キリスト教で歴史という時には、一方ではアウグスチヌ あるいは、この場合にも 方と理解される。

は、キリスト教の神との自己の実存的出会いを核心とするような出 卯花 村岡 永 子

えば、先の史実的歴史に対するドイツ語での Geschichte である。来事としての歴史である。この歴史は、ブルトマンの歴史解釈に従来事としての歴史である。 溯源するヒューマニズムの立場と、古代のローマ帝国によって世界 に広められることになったキリスト教の立場とにおける歴史の考え 以上は、西欧文化の二大支柱となっている、古代ギリシアにまで

あるが、小論で究めようとする本来的歴史、即ち自然と絶対矛盾的 主観と客観の分離の世界で一切が見られるような世界での時の流れ するところに成り立つと考えられるのである。私たちは、一面では 自己同一的に成り立つ歴史は、先に述べた二つの歴史のいわば交錯 事実上、年代記的歴史の中に生きている。しかし、この歴史は、 しかし、歴史はこの二つのいずれの方向からも考えられるのでは

において成り立っているような、客観的事実の羅列の集まりから成り立っているような歴史である。また、他面、私たちがあるいはキリュト教の最期の審判の時とか、あるいはある理想に向かって、しかもその理想の 成就の時を 基点として、 すべてをこれに 関係させて、いわば逆流する時の中で生きることも事実である。キリスト教的に言えば、最期の審判の時に、滅びの国である黄泉の国へではなく、永遠の生命を与えられる神の国へ行けるようにと、現在を清貧く、永遠の生命を与えられる神の国へ行けるようにと、現在を清貧く、永遠の生命を与えられる神の国へ行けるようにと、現在を清貧く、永遠の生命を与えられる神の国へ行けるようにと、現在を清貧く、永遠の生命を与えられる神の国へ行けるようにと、現在を清貧く、永遠の生命を持ついる。

に生き、過去をも常に現在の正しい行為によって正そうとする。

現実の世界に生き、且つ人間としての理想に燃え、あるいは宗教 現実の世界に生き、且つ人間としての理想に燃え、あるいは宗教 現実の世界に生き、且つ人間としての理想に燃え、あるいは宗教 現実の世界に生き、且つ人間としての理想に燃え、あるいは宗教 ないてはそのような本来的歴史のうちに生きるに際して、重要な役 が、本来的歴史とりである。年代記的な歴史と将来的な終末 論的歴史との交錯するところに成り立っているところの本来的な終末 かに見られる年代記的な歴史として出会われ、次いで、将来的な終末 ないてはそのような本来的歴史として出会われ、次いで、将来的な終末 かに見られる年代記的な歴史として出会われ、次いで、将来的な終末 ないこれら二方向の時が交錯する時、つまり、時が満ちる時として ないに見られる年代記的な歴史として出会われ、次いで、将来的な終末 ない、これら二方向の時が交錯する時、つまり、時が満ちる時として ないは宗教

ての現在と言われている。

実在とは、そこに其実在が露わとなるような歴史を意味する。更に、真実在とは、そこにおいて、歴史(世界)と自然と超越の次元とが一なるものとして経験されるような、絶対の開けの場である。つまり、本来的な歴史とは、史実的歴史と実存的決断に基づく歴史(Geschichte)との区別がいわばそこから出てくるような根源的な絶対の開けの場に成り立っているような歴史である。逆に言えば、Historie や Geschichte としての歴史が、いわばそこから初めて成り立ってくるような絶対の開けの場に、本来的歴史が成り立っているのである。このような根源的な歴史としての時は、アウグスチヌスにおいては、過去の現在、現在の現在、未来の現在と言われている。またキェルケゴールにおいては、永遠の今の自己限定としの瞬間と言われ、西田幾多郎においては、永遠の今の自己限定としの瞬間と言われ、西田幾多郎においては、永遠の今の自己限定としの瞬間と言われ、西田幾多郎においては、永遠の今の自己限定とし

を究めておかねばならない。 係において考察してみたい。そのためには、先ず『自然』とは何か外において考察してみたい。そのためには、先ず『自然』とは何か

一、自然

自然は、一般的理解では、西欧文化の精神的文柱となっているヒ

の今・此処において成り立つと考えられる。この場合、本来的歴史

3

においては、自然や人間は、神の支配下に統合されているものとさ うな階級制度を作り、堕落の道を辿ることになる。このような中世 質としたことはよく知られている。この時代には、人間や神々の世 成り立っているとし、水をすべてのものの中で変化しない根源的物 物の始原 (ἀρχή)と見られた。タレスが、 すべてのものは水から ているとする物活論から始まっている。そしてそこでは、自然は事 代ギリシアにおいては、哲学は、自然はみずから生命や霊魂を持っ 理解できる。事実、西欧文化の過去の歴史を振り返ってみると、古 ーマニズムやキリスト教とは無関係に探求されてきたかのように

界は自然のうちに統合されていると考えられている。

迷し、やがてソクラテスの出現によって自然よりは人間の、 己利益に重点をおくソフィストたちの活躍によって自然の探求は低 間における徳は結局は神の援助や救いがなければ成就不可能である に、自然も神々も統合されていた。しかし、古代末期になって、人 を利用して自らの地位をこの世で高きものと認めさせようとするよ よって支えられて成就するという方向へではなく、逆に人間は、神 と考えられ、やがて中世のキリスト教的な神探求の時代に入ってゆ 人間における徳の探求の道が開かれる。そこでは、人間の徳の追求 その後、真理や徳の問題にではなく弁証術やこれによる現世の自 しかし、中世は、事実上は、全体的に見れば、人間の徳が神に しかも

> とは独立した探求の道は開かれていなかった。 れ、神中心の神学や「神学の下僕」としての哲学の中で、自然の他

中心的な自然科学の 道も開かれてくる ことになる。 そして この後 中心的な研究の道としてのヒューマニズムが復活すると共に、 るを得なくなり、これら三者の領域の何らかの統合が、ニヒリズム は、ニーチェの予言し、指摘する如く、やがてニヒリズムに陥らざ になる。 これらの三つの 相互に独立し、 の自然科学の道とは独立して、自らの道をただひたすらに歩むこと の克服の道として要請されることになる。 しかしながら、イタリアに端を発するルネサンスによって、 神中心の神学の道も、人間中心のヒューマニズムも、自然中心 相互関係を 無視した歩み 自然 人間

は

生じて、これらの両極性が生まれ、前者が偏重され始めるや、顕わ 理の立場と生の立場、理性の立場と信仰の立場というような分裂が の道としての哲学の課題にはこれ以上立ち入ることができない。小 ても、兎に角、ニヒリズム克服の試みの哲学として生まれてきてい え、ニーチェ以後のような大きな哲学的な流れとしてではないとし イデッガーも指摘する 如く― となってくる。従って、西欧古代の形而上学の成立と同時に――ハ たと考えられる。 無論、ニヒリズム的徴候というものは、知の立場と信の立場、 しかし、小論においては、このニヒリズムの克服 先の 両極性の 克服の 試みが、たと

うかということである。そこで先ず、自然がどのように理解できる

論のテーマは、歴史と自然は、本来どのような関係にあるのであろ

は、先にも少し触れたことではあるが、自然は生命や霊魂を持つと古代ギリシアのミレトス学派の物活論(Hylozoismus)においてならない。

いこ目は、Continue returnetと、こと、自然にはなったになった。とこれで、生成変化の中で変化しない根源的な物質と考えられていた。そしてその場合、自然は世界の始原(dext)と考えられていた。そしてその場合、自然は世界の始原(dext)とは、先にも少し触れたことではあるが、自然は生命や霊魂を持つとは、先にも少し触れたことではあるが、自然は生命や霊魂を持つと

小宇宙としての人間という類比で考えられた古代ギリシア哲学以来いた自然(natura naturata)として理解されるようになる。そこれた自然(natura naturata)として理解されるようになる。そこれでは、自然自身の叡智ではなく、自然の支配者である神の叡智が働いていると見られるようになる。従って、ギリシアからルネサンスいていると見られるようになる。従って、ギリシアからルネサンスいていると見られるようになる。従って、ギリシアからルネサンスのの時代の推移と共に、自然概念の理解も、叡智的有機体としての自然へと変遷して行ったと考えられた自然、生まり、叡智をも生命をも欠く、神による被造物、作られた自然、生まり、叡智をも生命をも欠く、神による被造物、作られた自然、生まり、叡智をも生命をも欠く、神による被造物、作られた自然、生まり、叡智をも

的な理解へと変わってゆく。

や、更には、テイヤール・ド・シャルダンの神と宇宙の有機的進量子理論やハイゼンベルクの不確定性原理等の自然科学の領域におはる幾多の理論によって理解し直され、あるいはまた、動・植物にも主体性(Subjektivität)を認める V・V・ヴァイツゼッカーやも主体性(Subjektivität)を認める V・V・ヴァイツゼッカーやも主体性(Subjektivität)を認める V・V・ヴァイツゼッカーやも主体性(Subjektivität)を認める V・V・ヴァイツゼッカーの考えの理解を継承するその甥のC・F・シャルダンの神と宇宙の有機的進量子理論やハイゼンの相対性理論やN・ボーアのる。即ち、自然が、アインシュタインの相対性理論やN・ボーアの

これらの自然観の変化の中で、自然は更に、無機的な理解から有機れのみならず、A・N・ホワイトヘッドは、自然を過程と見なし、(3)また ″絶えず推移する出来事の複合体″ とも考えていることによって。そ程と見なされる中での自然の理解を経てきていることによって。そ程と見なされる中での自然の理解を経てきていることによって。それらの自然観り第一原因にして究極目的でもあるような神的充溢への過る、つまり第一原因にして究極目的でもあるような神的充溢への過

化、 円熟という 視点の下に キリストが アルファにしてオメガであ

ホワイトヘッドに典型的に見られるように、過程という歴史理解に起源』に早くも見られる進化の思想にも影響されて、自然は、右のの有機的進化の思想やそれ以前のチャールズ・ダーウィンの「種のの有機的進化の思想やそれ以前のチャールズ・ダーウィンの「種のが大きた。しかし、右に触れた例えば、テイヤール・ド・シャルダンできた。しかし、右に触れた例えば、テイヤール・ド・シャルダンできた。しかし、右に触れた例えば、テイヤール・ド・シャルダンにおける如く、経験の対象となる現象界の全体、あるいはヘーゲルにおける如く、経験の対象となる現象界の全体、あるいはヘーゲルにおける如く、経験の対象となる現象界の全体、あるいはヘービルを表しました。

ている。以上の事実は、また次の事実によって更に変化するのであ械という類比におけるルネサンスの自然理解へと変化したと指摘しの自然理解が、神の手仕事としての自然と人間の手仕事としての機

5

用を受けて、ホワイトヘッドやテイヤール・ド・シャルダンに典型 然は歴史的に理解され、自然といえば、歴史的自然にまで高められ た、我が国の最初の創造的哲学者である西田幾多郎においても、自 的に見られるように、有機的、目的的に理解されるようになる。ま パラレルに理解され始める。つまり自然は、過程や進化の概念の適 ねばならないように理解されており、自然は歴史との密接な連関の

に理解され始めていることが分かるのである。 歴史と自然との本来的にしてしかも自然なる関係が予感される方向 って却って、古代の元初的な自然理解を受け取り直す方向にあり、 生物学あるいはまた古生物学や神学、哲学、歴史学を経ることによ 以上のことから、自然は今世紀においてもまた、新しい物理学や

中で究明されようとしている。

然為

うなものであったかを、自然のギリシア語やラテン語の語源との連 さて、ここで、古代ギリシアにおける自然の最初の理解がどのよ

hen と訳され、これは日本語では『自ら然か成る』と訳される。ま(4) das von-sich-her Aufgehen あるらは das von-sich-aus Aufge-関において明らかにしておかねばならない。 自然を意味するギリシア語の póas は、ハイデッガーによって

語のπoinous(創造的に物を作ること)を、後者は誕生の他に本性 生命や霊魂をもつと考えられていたことを述べたが、ヘラクレイト と根源的に相通じている。 の φύας は、日本語の『自然』の一つの意味である『自ら然る』 と訳され、日本語では『自ら然か成ること』と訳されるギリシア語 をも意味する。また、ドイツ語では das von-sich-her Aufgehen と)に由来する。更に、前者の『自ら然か成ること』は、ギリシア た自然のラテン語は natura であるが、これは nasci (生まれるこ 先に、古代ギリシアのミレトス学派の物活論においては、自然は

ある。 西田における歴史的自然とか後述のヘラクレイトスに見られるよう 究めようとしていることが、以下のことであることである。 いかし、ここで明確にしておかなければならないことは、

る』という意味と根源的に通じているものがあると理解できるので スの『自然』の理解には、事実、日本における『自然』の『自ら然(5)

兮」、魚行似」魚。空闊。透示天兮」、鳥飛。如」鳥。』の境界、即ち、 でいえば第九図の「返本還源」におけるような自然であり、道元の な自然の元初的理解 『正法眼蔵』の坐禅箴の巻きに述べられているような "水清 徹"地 "真如"あるいは"如"の立場における自然であるが――は、自然 ーそのような自然理解は、廓庵禅師の十牛図 (6)

科学の研究対象となるような 自然 (以下 『自然科学的自然』 と略

取り直され得るが、これらを考察することが、小論の目的である。 そして、そのことによって、また同時に分裂した二つの自然の側面 互に分裂した自然の側面を究めることによって却って深められる。 然の分裂した自然科学的自然と純実在的な詩的自然との徹底的に相 よって、 初めて、 自己と自然とは 絶対矛盾的自己同一的に 成り立 である。しかし、第八図の『色即是空』(即ち、一切は空、即ち無 よって自覚されていても 自己に よって自 覚されていない 自然であ つ。しかし、この事実の自覚は、根源的な自然、つまり元初的な自 よって、つまり我執を離脱して絶対の無限の開けへと開けることに 実体的である)の経験、即ち自己の絶対否定の経験を介することに る。つまり、自己と絶対矛盾的自己同一的に成り立っていない自然 反して十牛図の第七図までの自然は、西田の用語に従えば、世界に は、同時に自己と、自己の心と絶対矛盾的自同一的である。これに た絶対の無限の開けとしての超越の次元とも絶対的に独立した自然 て自覚されるということである。十牛図の第九図の、自己とも、ま 裂した自然の分析的な理解によって、一層深く私たちの自己によっ 然』と略記)に分裂するが、分裂以前の元初的自然は、後二者の分 記)と純実在的な詩的・文学的な自然(以下 "純実在的な詩的自 根源的、元初的自然において、キェルケゴール的な意味で受け 質の方向への真理探求はヘーゲルによって代表され、実存や主体性 の方向への真理探求はキェルケゴールにおいて典型的である。 は、これら両者の根源へと遡及してゆかざるを得ないのである。本 その逆に人間の実存とか主体性の方向に真理を見出そうとする試み 質の方向に真理を見出そうとしたり、あるいは、その否に気づいて 性にも真理を認めるようになる。しかし、有るものの有としての本 理解できることである。つまり、人間は先ず最初に真理を自らの外 ると考える。このことは、例えば、廓庵禅師の十牛図においても、 らの構造上、有るものの有としての本質(essentia)に真理が存す 性のうちに 本来成り立っている からである。 人間は、 先ずその自 即ち、人間の存在の構造そのものが、有限性と無限性との、時と永 の世界に属する実存に、あるいはキェルケゴール的な意味での主体 て人間は初めて、本質とは見なされない現象界、時間の世界、意識 に、客観的に存するものとして求めてゆく。そして、この道を通っ 遠との、あるいはまた必然性と可能性との複雑に交錯している同一 は、先ず何よりも、人間が本質的に形而上学的であることによる。 もの (das Sein selbst) に直接係わることはなかった。 このこと るものの有 (das Sein des Seienden) に携わってきたが、有その ゲルあるいはニーチェ以前迄は、ハイデッガーの用語に従えば、あ ところで、アリストテレス以来の西欧の伝統的形而上学は、ヘー 的なことなのである。

ἀρχή, 始めにして 根拠にしてまた原理) と理解されている。 そしーに おいては、 哲学の 始原 (乃至元初)(Anfang, principium, しかし、真理の探求のこれら二方向の根源は、例えばハィデッガ

学的、宗教哲学的に表現すれば、次のことを意味する。即ち、人間ければならないと考える。このことを、ハイデッガーを離れて、哲て彼は、哲学は今や哲学の元初に退歩(der Schritt zurück)しな

は、その形而上学的な性質により先ず本質の側面に真理を探求する

しかし、いずれの片方だけでも、真理は人間にとって真実に真理でゆかざるを得ないために、実存の方向へも真理を求めようとする。られている為に、生きる意味や目的を失ってニヒリズムへと陥ってが、これを突き進めてゆくと、人間の他の一方の側面が全く忘れ去

史にとっても偶然的なことではなく、人間の存在構造にとって本質へと遡及してゆかざるを得ない。これは、人間にとっても人間の歴あることはできないことに気づかざるを得ず、人間は両方向の根源

は、púass は、『自ら然か成る』 という有り方で、 有そのものが覆先ず、 古代ギリシアの 元初的な 思索家ヘラクレイトスに おいても、また日本の自然の理解にも存する。 しかるに、この 元初的な思索が、 古代ギリシアの自然の 哲学にしかるに

察されている。

蔵されるという仕方で有るものの有が露わとなることを意味する。

る。そのものが自らを 覆蔵するという 仕方で 露わになっているのであつまり、有るものの有の露わになることは、そのことによって、有

のwho frason への転換という、西田哲学における核心的用のwho frason への転換という、西田哲学における核心的用ること (ποίησις) の創造的な生産性とか、あるいは franch を存ること (ποίησις) の創造的な生産性とか、あるいは franch を作ること (ποίησις) の創造的な生産性とか、あるいは franch を存ること (ποίησις) の創造的な生産性とか、あるいは franch という有の側面と、

との関係において成り立っている表現的形成的作用の二側面から考係において成り立っている目的的作用と、人間の自己の超越の次元は、人間の二側面から考察されている。即ち、人間の自己の自己関西田哲学に おいては、 創造的にものを 作る ポイエーシスの立場

語のうちにも読み取れるのである。

ばノエシス面(意識の作用面)のノエマ(意識の対象面)化とも言表現的形成的作用の側面は、空間的、歴史的立場であり、換言すれ自己の目的的作用の側面は、人格的な意識の立場であり、自己の

共に絶対無であるアガペー(神的愛乃至慈悲)の限定によって成り自らの関係自身に関係するという関係、つまり、自己追求的な自己の側面と、絶対矛盾的自己同一的に成り立っている。前者は、い己の側面と、絶対矛盾的自己同一的に成り立っている。前者は、いわば、自ら然る、側面であり、後者は、自ら然る、側面である空間の側面と、絶対矛盾的自己に見している。方の側面である。前者は、いるが、自ら然る、側面であり、後者は、自ら然る、側面であるを問しかしている。前者は、いつの関係の方の関係がこのと、他対策がより、との関係がこの共に絶対無であるアガペー(神的愛乃至慈悲)の限定によって成り、大きなという。

自己の空間的、歴史的な側面とは、繋の直接的限定の立場である。西田においては、歴史はその核心を繋によって成立すると考え受にある。逆に言えば、本来的歴史は愛によって成立すると考えられるのである。因みに、ヘラクレイトスの ゆがな から歴史を思られるのである。因みに、ヘラクレイトスの ゆがな から歴史を思られるのである。因みに、ヘラクレイトスの ゆがな から歴史を思られるのである。 世紀には、歴史的な側面とは、繋の直接的限定の立場である)が要となっている。

立っていると考えられる。

として成り立っていた自己が、自我に死して本来的自己に生まれ変己的追及の事実の歴史しかあり得ないことになる。しかるに、自我始すれば、本来的歴史は成り立たず、自我追求や、国家や民族の利ら己が真の自己、本来的自己に目覚めずに、自我の追求のみに終

間的愛乃至哲学的愛)、カリタス(アガペーとエロスの統合体とし間的愛乃至哲学的愛)、カリタス(アガペーとエロスの統合体としば、フィリア(φιλία, 友愛)、慈悲、あるいはエロス(ξρας, 人ペー、フィリア(φιλία, 友愛)、慈悲、あるいはエロス(ξρας, 人ペー、フィリア(φιλία, 友愛)、慈悲、あるいはエロス(ξρας, 人ペー、フィリア(φιλία, 友愛)、

ようとしているからである。 何故なら、西欧の有るものの有の歴史史の軌跡を描くことになる。何故なら、西欧の有るものの有ると理解されらるように、西田哲学における歴史は、絶対無としての愛が自らを隠すという仕方で自らを露顕している、愛による出来事の歴史とも理解されうるからである。 しかも、西田哲学においては、後述のように、このような歴史理解のうちで、自然も理解されようとしているからである。

ところで、形而上学的な思惟は、知と信の、論理と生(命)の分裂

ての慈愛)等々の愛の表現をとり、この現象の世界に種々の形の歴

ず、身体的な存在でもある限り、不可避的である。しかも尚、この が始まると同時に開始するが、この分裂は、 や詩作の世界が、古代ギリシアの、例えばハイデッガーの指摘する 信仰の立場とが絶対矛盾的自己同一的に成り立っているような思索 次元を超越し、論理と生、あるいは理性の立場である知識の立場と 分裂を克服した元初的な思索が、即ち、本質と実存の分裂している あるいは西谷哲学にも見られるのである。 ヘラクレイトスや日本の万葉集、あるいは三祖僧璨の『信心銘』や (7)

であろう。しかし、それらの例においては、事実上、元初的な思索 的、元初的思索あるいは詩作であるとの自覚乃至は反省はなかった が、本質と実存との区別がいわばそこから出てくるような、根源 無論、ヘラクレイトスや 万葉集に おいては、 彼らの 思索や詩作

ながら、もう少し詳しく究めておかねばならない。 の元初的思索の特徴を、ハイデッガーのヘラクレイトス理解を介し は、古代ギリシアのソクラテス以前の哲学者であるヘラクレイトス 歴史と自然との関係を根源的、元初的に思索するために、ここで

や詩作が見られるのである。

三、ヘラクレイトスの元初的思索

ソクラテス以前の古代ギリシアの自然哲学においては、水や土、

9

る法則をロゴスと認めた。 スも、生成変化の中に不変なものとして、この生成変化の中に存す ἀρχήと考えられた。これに対してヘラクレイトスは、周知の如く、 火、風等は現象界の生成変化の中にあって変化しない根源的物質、 "万物は流転する"と考えて生成を強調した。しかしヘラクレイト

人間が 霊的のみなら

論理と生、知(識) と信(仰) との区別以前の、哲学の元初(始 Ganzen)である。しかし、元初的に思索する場合には、つまり、 であり、全体としての有るものの有 (das Sein des Seienden im には、ハイデッガーも指摘する如く、有るものの概念であり、意味(8) Unverborgenheit) や φύσις (自然) と同一であると見なす。しか 原)における思索は Aoroc を、区別に満ちた一者である tò、Ev である。つまり、 根源的な結集 (ursprüngliche Versammlung) もロゴスは、その語源から拾集と収集(λέγεω)によって特徴づ けられる場合、生命(ξωή)と魂(ψυχή)——ψυχή、つまり魂を吹 において、 ἀλήθεια (非覆蔵性、ハイデッガーのドイツ 語訳は へと根源的に自己結集 (sich versammeln) してゆくという 意味 る」という特徴と同一であり、従って生命はロゴスを持つことがで(19) き込むことと、 ξωή (生命) とは 同一の ことと考えられて いるが ところで、ロゴスは、元初的思索においてではなく、形而上学的 ―の「自らを開くことに よって 外に出して 取り入れる ことであ

開かれているというのである。

きるというのである。そして、こういう仕方で人間は、ロゴスへと

元初的思索においてはどのように考えられるのかを、ここで究めて合と 同様、「自らの内へ-戻り-行くこと」(das In-sich-zurück-gehen)でもある ところの「自ら-の内から-立ち 現われる こと」(das Aus-sich-heraus-gehen)であるという。そこで、 φύας はている Aus-sich-heraus-gehen)であるという。

おかねばならない。

へラクレイトスは断片一二三で Dúass κρύπτεσθαι φιλει (自然

「立ち現われること」は隠れることを好む)と述べ、これをディー「立ち現われること」は隠れることは自らを覆蔵することに恵みを贈る」と訳している。このことは先ず、自然(das von-sich-her Aufgehen)(自) ら然か成ること)は、つまり立ち現われることに属していることを意味している。つまり、「覆蔵する立ち現われる」というフィリア(友愛)の単純な本質は やがで であるというのである。しかも、立ち現われることが自らを覆蔵することであるというのである。しかも、立ち現われることが自らを覆蔵することであるというのである。しかも、立ち現われることが自らを覆蔵することに、次のようと自体は、それ自身いわば遊戯のうちに安らっていて、そのような遊戯として立ち現われることは、「有」に妥当する。つまり、やがで の有り方は有そのものの有り方と見なされるのである。そして、やがで が立ち現われること自体は、それ自身いわば遊戯のうちに安らっていて、そのような遊戯として立ち現われることは、自らを覆蔵することに、次のような遊戯として立ち現われることは、自らを覆蔵することに、次のような遊戯として立ち現われることは、自らを覆蔵することに、次のような遊戯として立ち現われることは、自らを覆蔵することに、次のような遊戯として立ち現われることは、自らを覆蔵することに、次のような遊戯として立ち現われることは、自らを覆蔵することに、次のような遊戯として立ち現われることは、自らを覆蔵することに、次のような遊戯として立ち現れることは、方は、

ざすこととの、露顕と覆蔵との接合(ἀρμονία)によって成り立った本質根拠である。つまり、φύαις は立ち現われることと自らを閉た本質根拠である。つまり、φύαις は立ち現われることと自らを閉 失に述べた、非覆蔵性と訳される真理 (ἀλήθεια) のうちへ露顕

に留まらせるという恵みを。(18)

スのハイデッガー解釈によると、「自ら-然か-成る」、 自然の歩み

ており、これは、有の真性(Wahrheit) でもある。 ハイデッガー においては、先にも述べたように、形而上学は、有るものの有に携 ば、das Sein selbst が das Sein des Seienden として露顕し、 有そのもの 有るものの有 の関係ともなっている。しかも立ち現われることは、自ら然か成る 関係が、φύσς における出現 (Aufgehen) と覆蔵 (Untergehen) が、このような有そのものの露顕と覆蔵の絶対矛盾的自己同一的な (das Sein des Seienden) として自らを露わにしているのである は、有そのものは 自らを 隠すという仕方で、 却って 有るものの有 いわば有の忘却のうちに 進んで きたのであり、 形而上学に おいて わり、有そのもの (das Sein selbst) には係わらない。 それは、 によって 生成 されてきた 有の歴史 (Seinsgeschichte) としての 前者が覆蔵されるという仕方で進められてきた、いわば有そのもの 有の露顕が、有そのものを覆蔵するという友愛であるというのであ れ自身が覆蔵することでもあり、これら両者の関係は、有るものの こととして遊戯のうちに安らい、その上立ち露われることは、有そ る。しかもこの歴史の歩みは、以上の元初的な思索家へラクレイト das Sein des Seienden の歴史であると理解することが可能であ有るものの有 ところで、ヨーロッパの哲学の歴史は、ハイデッガー的に言え

て、そのような自然の歴史は、自然に、いわば遊戯のうちに進んでのものを覆蔵することに恵みを贈ることでもあるのである。そしでもある。しかも、有るものの有として有が露顕することは、有そ

いると理解される。

解されうるわけである。しかも、そのような歩みが φιλία による思索の意味において生命(ξωή)の歩みとも λόγος の歩みとも理このような自然の歴史が遊戯のうちに自然に歩む歩みは、元初的

四、西田哲学における歴史的自然

ものであり、このフィリアの本質は自然と理解されうるのである。

からの歴史と自然の 思索は、 西田哲学に おいても 見られるのであ右に見てきたような、自然、ロゴス、生命、非覆蔵性そして友愛

り立っていたのではあるが、自己は先ずそれに無自覚的である。と の正哲学の前半期においても、世界の自覚は自己の自覚と同時的に成 ではなるのは、西田哲学自身が、人間の実存の「自己の自覚」が根 うになるのは、西田哲学自身が、人間の実存の「自己の自覚」が根 うにないて自己を見る」といういわば己事究明を課題としている西 こにおいて自己を見る」といういわば己事究明を課題としている西 とにおいて自己を見る」といういわば己事究明を課題としている西 はうになってからのことである。「自己の自覚」が根 うになっていたのではあるが、自己は先ずそれに無自覚的である。と

ころが、自己の自覚は、最初から世界の自覚と同時的に成り立って

おり、しかも前者は後者によって成り立っていることに、自己は自おり、しかも前者は後者によって、対する。即ち、自己中心的で自己をとに覚する。何故なら、自己は、自己の自己に対する関係から成り立っているのみならず、既に述べたように、同時に超越の次元へのとに覚する。何故なら、自己は、自己の自己に対する関係から成り立っているのみならず、既に述べたように、同時に超越の次元への麒麟のない関係という、いわば透明な二重の関係のうちに成り立っているからである。

成り立っていることに覚することである。 的作用と見なされ、自己の超越の次元への関係が表現的形成的と言的作用と見なされ、自己の超越の次元への関係が表現的形成的と言いる。その中で重要なことは、先にも述べた自己の自己関係が目的以上のような西田の自己理解は、「実践哲学序論」に詳論されて以上のような西田の自己理解は、「実践哲学序論」に詳論されて

て、自己が真に自己に覚する時には、自然にも覚し、超越の次元にとの絶対矛盾的自己同一のうちに成り立っているからである。従っめてまた自然にも目覚める。というのも、自己は自然と超越的次元相即性に覚した時に、生まれ変わった自己、即ち本来的自己は、初相即性に覚した時に、生まれ変わった自己、即ち本来的自己は、初れの主に、自己の自覚と世界の自覚のところで、自己が自我の死によって、自己の自覚と世界の自覚の

も覚するのである。

さて、絶対無とは、すべての有るものは、無実体的であり、それらの独立性は、相互依存的に成り立っているという、自らの絶対の否定がその構造上、正にその否定によって却って絶対の肯定に転じるという悉有の成り立ち方をいう。西田哲学においては、中期の「場所の論理」の成立以来、超越の次元は右に述べた如き絶対無の自己が本来自己と世界の関係は、後期の西田哲学において、自己の自覚が本来的には世界の自覚から成り立っており、両者の自覚は本来、絶対矛的には世界の自覚から成り立っており、両者の自覚は本来、絶対矛的には世界の自覚から成り立っており、両者の自覚は本来、絶対矛的には世界の自覚から成り立っており、両者の自覚は本来、絶対矛的には世界の自覚から成り立っており、両者の自覚は本来、絶対矛的には世界の自覚から成り立っており、両者の側面としての自己の絶対の否定がであり、それらでなった。このことは、先に自己の自己関係の側面としての目的的作用と自己の超越の次元へと関係としての表現的形成的作用について述べたことでもある。

問題は、西田哲学における自然の理解である。というのも、そこの自然や歴史の理解と類似している側面を先ず究めておかねばなる、その問題に移る前に、西田における歴史的自然がヘラクレイトし、その問題は、西田哲学における自然の理解である。というのも、そこ

めて重要ではある。特に、十九世紀後半以来、ダーウィン等の自然自然が歴史的自然として理解されることは、一面においては、極

科学者における進化の思想や、精神科学における歴史主義の横行には、極く当然のことである。それどころか、後述するように元初とは、極く当然のことである。それどころか、後述するように元初とは、極く当然のことである。それどころか、後述するように元初とは、極く当然のことである。それどころか、後述するように元初とは、極く当然のことである。それどころか、後述するように元初と歴史の関係の問題についてのヒントを与えてくれる。

未の同時的である世界)において理解されていることを示していたい、自然が専ら自己と自然と超越の次元である弁証法的一般者ととは、自然が専ら自己と自然と超越の次元である弁証法的一般者ととは、自然が専ら自己と自然と超越の次元である弁証法的一般者ととは、自然が専ら自己と自然と超越の次元である弁証法的一般者ととは、自然が専ら自己と自然と超越の次元である弁証法的一般者ととは、自然が専ら自己と自然と超越の次元である弁証法的一般者ととは、自然が専ら自己と自然と超越の方法の一般を表している。自然が表している。

ラクレイトスにおける有そのものが有るものの有として立ち現われレイトスの自然や歴史の理解との類似性が見出される。つまり、へ理解し、これを歴史的自然と名づけることには、先に述べたヘラク以上のような、人間と自然と超越の次元との統合経験から自然を

ることが有の自己覆蔵であるという、自ら然か成る弁証法的運動

ある。

れ、専らそのような愛に成り立つ歴史から自然が理解されているこれ、専らそのような愛に成り立つ歴史から自然が理解されているこれ、専らそのような愛に成り立つ歴史から自然の関係のあり方に類似している。即ち、自然を常に歴史的自然として、つまり永遠の今の自己限定として理解し、しかもその自己として、つまり永遠の今の自己限定として理解し、しかもその自己として、つまり永遠の今の自己限定として理解し、しかもその自己として、つまり永遠の今の自己限定として理解し、しかもその自己として、歴史を成り立たせい、正に有の歴史(Seinsgeschichte)としての歴史を成り立たせが、正に有の歴史(Seinsgeschichte)としての歴史を成り立たせが、正に有の歴史(Seinsgeschichte)としての歴史を成り立たせが、正に有の歴史(Seinsgeschichte)としての歴史を成り立たせが、正に有の歴史(Seinsgeschichte)としての歴史を成り立たせが、正に有の歴史(Seinsgeschichte)としての歴史を成り立たせ

五、歴史と自然

とに。

と自然の問題の思索において、欠かすことのできない根源的思索でとよりうるであろうか。西田やハイデッガー解釈に基づくヘラクレとなりうるであろうか。西田やハイデッガー解釈に基づくヘラクレとなりうるであろうか。西田やハイデッガー解釈に基づくヘラクレとなりうるであろうか。西田やハイデッガー解釈に基づくヘラクレとなりうるであろうか。西田やハイデッガー解釈に基づくヘラクレとなりうるであろうか。西田やハイデッガー解釈に基づくへラクレとなりうるであろうか。西田やハイデッガー解釈に基づくへラクレとなりうるであろうか。西田やハイデッガー解釈に基づくへラクレとなりうるである。この思索はどことのできない根源的思索である。この思索はどことのできない根源的思索である。

しかし、ヘラクレイトス以来二千五百年余りの年月を経、特に近

思索に対して、分析的な思索も欠かすことができないと考えられるとない重要な側面と考えられるのである。つまり、統合的な元初的解をふまえての歴史と自然の他の側面からの探求も欠かすことので解をふまえての歴史と自然の他の側面からの探求も欠かすことのでという。

のである。

ヘラクレイトスに見られるような元初的思索に見られる、自然に

析的思惟が専ら重視されてきたと言っても過言ではない。 性起する有そのものの覆蔵における "有るものの有"の露顕乃至立性起する有そのものの覆蔵における "有るものの有"の露顕乃至立

れても評価されすぎることはないであろう。西田が自然を――ヘラよって自然を歴史的自然として思索したことは、どれ程高く評価さこの意味において、東洋の哲学者西田幾多郞が再び元初的思索に

で多あるいは個として露顕する歴史的自然と理解することは、現代ると解釈されうるが――絶対無のいわば自らを覆蔵するという仕方クレイトスでは絶対無としてではなく、有そのものと理解されてい

において大いなる意味を持つのである。

然については、自然科学的自然と純実在的な詩的自然との絶対矛盾がについては、年代史的歴史と自然の概念もそれぞれに分裂を経た二十世紀において、かも歴史と自然の概念もそれぞれに分裂を経た二十世紀において、場索し、更に、キェルケゴール的な意味において、受け取り直す。場索し、更に、キェルケゴール的な意味において。受け取り直す。場索し、更に、キェルケゴール的な意味において。受け取り直す。場索し、更に、キェルケゴール的な意味において。受け取り直す。場索し、更に、キェルケゴール的な意味において。受け取り直す。場際と自然との関係が分裂を経、ししかし乍ら、古代の統合的な歴史と自然との関係が分裂を経、ししかし乍ら、古代の統合的な歴史と自然との関係が分裂を経、ししかし下ら、古代の統合的な歴史と自然との関係が分裂を経、ししかし下ら、古代の統合的な歴史と自然との関係が分裂を経、ししかしていては、自然科学的自然とのに表する。

次元からの新しい問題との対決を余儀なくされており、己事究明と二千五百年程の年月によって、諸概念は歴史的な次元としての水平ならないと考えられるのである。何故なら、ヘラクレイトス以来の旅り立つ根源的な両者の関係存在としての歴史的自然が。しかも、成り立つ根源的な両者の関係存在としての歴史的自然が。しかも、

にされねばならない。また歴史と自然との絶対矛盾的自己同一的に

的自己同一的に成り立つ自然としての本来的、根源的自然が明らか

学・技術の極度に進展した現代において、真実在の世界は私たちに能となっているからである。しかも水平次元に性起する事柄は、すべて己同一的に成り立っているのであるから、現代においては、すべての問題は、統合的にと 同時に分析的に、 また 分析的にと 同時に統の問題は、統合的にと 同時に分析的に、 また 分析的にと 同時に統の問題は、統合的にと 同時に分析的に、 また 分析的にと 同時に統の問題は、 現代においては殆んど不可いう垂直次元のみにおける問題解決は、現代においては殆んど不可いう垂直次元のみにおける問題解決は、現代において、真実在の世界は私たちに

明らかにされ得ないのである。

本詩的自然とが、また総じて水平的次元と垂直的次元とが交錯してな詩的自然とが、また総じて水平的次元と垂直的次元とが交錯してな詩的自己同一的に成り立っているような場の開けである。それは、華厳の四種法界で言えば、事々無礙の世界であり、換言すれば、華厳の四種法界で言えば、事々無礙の世界であり、換言すれば、そこでは一切があるべき姿とあるがままの姿が一でありうるような自由自在の世界である。理と事、知と信、論理と生、一と多というような両極的なものが、人間の自己の絶対否定を通して絶対矛盾的自己同一的に成り立っているような場の開けである。それは、年代記的歴史と終末論的歴史とが、また総じて水平的次元と垂直的次元とが交錯してな詩的自然とが、また総じて水平的次元と垂直的次元とが交錯してな詩的自然とが、また総じて水平的次元と垂直的次元とが交錯してな詩的自然とが、また総じて水平的次元と垂直的次元とが交錯してな詩的自然とが、また総じて水平的次元と垂直的次元とが交錯してな詩的自然とが、また総じて水平的次元と垂直的次元とが交錯してな詩の目が、

る私たちに開かれ難いからである。

これねばならない。そうでなければ、真実在の世界は、現代に生きされねばならない。そうでなければ、真実在の世界は、現代に生きされねばならない。そうでなければならないと考えられる。しかも、いうことが明確に解明されて、それらの絶対矛盾的自己同一的歴史としての本来的歴史(即ち、自然の歴史)として成り立っているととしての本来的歴史(即ち、自然の歴史)として成り立っているととしての本来的歴史(即ち、自然の歴史)として成り立っているととしての本来的歴史(即ち、自然の歴史)としての歴史的自然が、絶対に相いうのではなく、「自己の大死」によって反対の両極が、絶対に相いうのではなく、「自己の大死」によって反対の両極が、絶対に相いうのではなく、「自己の大死」によって反対の両極が、絶対に相いうのではなく、「自己の大死」によって反対の両極が、絶対に相いうのではなく、「自己の大死」によって反対の両極が、絶対にはきされればならない。そうでなければ、真実在の世界は、現代に生きされねばならない。そうでなければ、真実在の世界は、現代に生きされねばならない。そうでなければ、真実在の世界は、現代に生きされねばならない。

然の問題を思索する場合には、先ず歴史においては、有のフィリアな 愛 愛

ることが示されなければならないと考えられる。 地域の弁証法的働きが究明された後、更にその後分裂して が表する。 を がしたされ、それら両者の絶対矛盾的自己同一的な自然としての がはいう自然の弁証法的働きが究明された後、更にその後分裂して のは、第二に自然においては、有の隠蔽による有るものの有の露 また、第二に自然においては、有の隠蔽による有るものの有の露

有限でもあり、無限でもある自己が、元初的思索の時代を二千五

以上のような意味合いにおいて、元初的な思索において歴史と自

いるところに正に開けている絶対の開けとしての真実在の世界であ

15

高、後者だけでは、実在の世界へは近づき難い。 には、元初的思索へと水平的にも垂直的にも退歩しなければならない。しかし、その後の分裂の時代、つまり形而上学的な時代をも経い。しかし、その後の分裂の時代、つまり形而上学的な時代をも経たちは、元初的思索だけでは真実在の世界を自覚し難く、また、無たちは、元初的思索だけでは真実在の世界へは近づき難い。

更に第三に、歴史と自然の関係は、ヘラクレイトス)が明らかにされなけれな、本来的なる、歴史と自然の関係が、つまり歴史的自然(西田)な、本来的なる、歴史と自然の関係が、つまり歴史的自然(西田)な、本来的なる、歴史と自然の関係が、つまり歴史的自然(西田)な、本来的なる、歴史と自然の関係は、ヘラクレイトスや西田におけている。

牛図の第九図におけるような自然の究明も必要である。

によって、真実在の世界における両者の絶対矛盾的自己同一性を自 過程を経てきている。私たちは、それらの諸分離や分裂を学ぶことに明らかになる。歴史と自然の世界は、事実、多様の分裂や分離の田の元初的思索によって示されてはいるが、そのような統合的世界田の元初的思索によって示されてはいるが、そのような統合的世界田の元初的思索によって示されてはいるが、そのような統合的世界田の元初的思索によって、真実在の世界における両者の絶対矛盾的自己同一性界は、ヘラクレイトスや西

覚的に理解することができる。

然とが絶対矛盾的自己同一的に成り立っているような廓庵禅師の十態で相互に別々に取り扱われるべきである。しかし、この高く評されるべき歴史的自然が、私たちに自覚的に理解されるためには、自然必要であり、年代記的歴史と終末論的歴史が相互に独立に突められ必要であり、年代記的歴史と終末論的歴史が相互に独立に突められ必要であり、年代記的歴史と終末論的歴史が相互に独立に究められ必要であり、年代記的歴史と終末論の歴史が相互に独立に完められることも必要である。更に、歴史と自然が切り離されたことは、先にも続の問題が、西田の元初的思索によっているような廓庵禅師の十歳とが絶対矛盾的自己同一的に成り立っているような廓庵禅師の十歳とが絶対矛盾的自己同一的に成り立っているような廓庵禅師の十歳とが絶対矛盾的自己同一的に成り立っているような廓庵禅師の十歳とが絶対矛盾的自己同一的に成り立っているような廓庵禅師の十歳とが絶対矛盾的自己同一的に成り立っているような原庵禅師の十歳とが絶対矛盾の自己同一的に成り立っているような原庵禅師の十歳とが記れているような原本禅師の十歳といるような原本禅師の十歳とが経対矛盾の自己同一的に成り立っているような原本禅師の十歳といるような表もないといるような表もない。

るのである。

の究明と、両者の関係の両極的理解によって可能となると考えられの究明と、両者の関係の両極的理解によって可能となると考えられれうる。しかし、その世界の自覚は、歴史と自然のそれぞれの両極れする。

的思索のみならず、分裂面、分析面をも思惟によって、しかも非思後者は田辺元の分析的思惟をも取り入れて、自覚的に統合的、元初能となっている。何故なら、前者は統合面に全力を注いでいるが、能となっている。何故なら、前者は統合面に全力を注いて初めて可の極の探求は、西田幾多郎の高弟である西谷啓治において初めて可のをの探求は、西田幾多郎の高弟である西谷啓治における各々ここで詳論する暇ばないが、これらの二重の両極性における各々

る。 量の思惟を根底におきながら真実在を究めようとしているからであ

自覚的になるということである。

以上の論述によって明らかにされようとしたことは、以下のことは対よ、そのことによって、私たちが真実在の世界に生きることも対る友愛やアガベーをその本質としている本来的歴史に基づいて自計的自然との究明や理解を通して、より一層根源的に自覚され、しかも友愛やアガベーをその本質としている本来的歴史に基づいて自計され、そのことによって明らかにされようとしたことは、以下のこと以上の論述によって明らかにされようとしたことは、以下のことは、以下のこと

註

- (-) Augustinus, Coufessiones, Kösel-Verlag, München, 1966,
- (2)拙論(川村永子著)「"空"の哲学——"神的充溢"と"神のS. 640ff. 参照。
- R.。 一九八九年、 京都 宗教哲学会編、 北樹出版) 三三頁 以下 参結果的本性』との関連において――」(「宗教哲学研究」 六巻、
- (m) A.N. Whitehead, *The Concept of Nature*, Cambridge at the University Press, 1955 参照。
- (4) Martin Heidegger, Die Frage nach der Technik, in Vorträge und Aufsätze, Neske, S.15 参聚。 Heraklit

- (Gesamtausgabe, Bd.55), Vittrio Klostermann, Frankfurt am Main, S.280, 367.
- (15) Heraklit, Fragment Hrg. von Bruno Snell, Artemis Verlag, München u. Zürich, 1989.
- 教と西田哲学』、新教出版、一九八八年、二〇頁以下参照。(6) 廓庵禅師の十牛図については拙著(川村永子著)『キリスト
- 田聖山、辻村公一著)、二一頁参照。
- (Φ) Ibid. S. 371.
- (\(\mathcal{\Pi}\)) Ibid. S. 281.
- (\(\pi\)) Ibid. S. 280.
- (2) Ibid. S. 17.
- (3) Ibid. S. 17.
- (4) Ibid. S. 110.
- (4) Heraklit, Fragmente, S. 36, Die Fragmente der Vorsokratiker, Hrg. von Walther Kranz Bd. 1, 1989, Weidmann, S. 178.
- (\(\mathbb{G}\)) M. Heidegger, Ibid. 121
- (\(\tau\)) Vgl. Ibid. S. 365.
- (≅) Vgl. Ibid. S.139.
- 想と言語――』所収、東方出版)、四一頁参照。 永子著)「自由の問題」(『キェルケゴール――デンマークの思え子著)「自由の問題」(『キェルケゴール――デンマークの思え子著)「西田幾多郎全集』(岩波書店)、第一〇巻所収。拙論(川村

- (21) 『西田幾多郎全集』、第八巻、八六、一五三頁参照。
- 22) 『西田幾多郎全集』、第一巻四頁。

参考:文献

- ∴ Carl Friedrich von Weizsäcker, Die Einheit der Natur, Carl Hanser Verlag, 1971.
- v. v. Weizsäcker, Gestalthreis, Georg Thieme Verlag, Stuttgart, 1950.
 R.G. Collingwood, The Idea of Nature, Oxford at the
- 『アリストテレス全集』、岩波書店。
- 「西田幾多郎全集」、岩波書店。

6. 5.

- 『田辺元全集』、筑摩書房。『西谷啓治著作集』、創文社。
- Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Vittrio Klostermann.